

ぎやかだつた車内も列車の規則正しい振動を子守歌に、間もなく1人、2人と夢の国へ。

7月16日 (第2日目)

11時53分 盛岡 — 休屋

東北地方を襲つた台風の爪痕の景色を車内より観る。車内は食べ物のかすや新聞紙がいっぱい散乱している。この長い汽車の旅。

待ちかねの十和田南に14時35分着。

そこから京都では見かけぬ国鉄バスで休屋まで。途中、発荷時から十和田湖展望・広々とした湖をバツクに全員で記念撮影。

心配されていた雨もどうやらやんで、16時、休屋から1時間の湖上遊覧。青藍色の水面、遠く木間より見える乙女の像。私達はただその美しさに目を見張るばかり。

17時、十和田観光ホテルに着く。

前夜は、車中泊だつた為か、非常な疲れを覚えたが、この湖畔のホテルにてゆつくりと癒すことが出来た。

## 十和田 → 函館



2班 短食2の1

(宇治橋, 真梶, 曾我, 岩藤)  
(上任, 佐々木, 坂部, 久保)

7月17日 (第3日目)

十和田湖畔での一夜が明け、今日は牛乳とアイスクリームの本場である北海道へ行けると思うと、胸が高鳴る。さすが東北だ。朝は涼しいのを通り越して、むしろ寒かつた。でもあの十和田湖の美しさが忘れられず、再び湖にそつて遊覧船の中から小さく見えた乙女の像まで歩き、ロマンチックな想いを抱かせた透き通る青藍色の湖水に別れを告げ、奥入瀬に向かつた。小雨がしとしと降り始め、バスの中から眺めた湖は、かすんでいて、いつそう私達をひきつけ、去り難い感じだつた。まもなく右に左にと濃い緑の樹木の間から、静閑さの中にも男性的な雄壮さや崇厳さを連想させる美しい滝。又それとは対照的に優美な女性的な滝、可愛い女の子を想わせる滝等、様々な装いをした滝が、或る時はやさしく、又或る時ははいねいに私達を迎えてくれた。うつそうと茂つた林の中に、白いしぶきを放

っている滝の美しさには心憎い気がしないでもなかつた。グリーンアンドホワイトの調和。東北にもこんな素晴らしい所があつたのかと驚かされ、同時に、ここを歩いたらどんなに素敵かと何度思つたことか。この時、バスの方で私達の気持を察してくれたのか急に音もなく、タイヤの空気がもれ出して、私達一行はバスを降りて、小雨のけむる中を、レインコートと相合傘で、溪流と緑の樹木の美しさを満喫しながら歩いた。○ヤングレディ曰く「彼と歩いたらどんなに素晴らしいだろう！」それほど奥入瀬の溪流は情緒があり又、石が戸の洞屈では興味ある話をも聞いた。石が戸の洞屈から再びバスにゆられて、八甲田連峰を横目に、冬はスキーが出来るといふ見晴しの良い高原を走つて、本州の最北端、青森へと向かつた。

青森駅から連絡船までの、ものすごく長いプラットホームを渡り、階段を上り、重い荷物を持って、やつとのことで連絡船に乗り込むことが出来た。いよいよ本州とも一週間のお別れで、憧れの地、北海道に向かつて出発。私達の胸は、普段の何倍かにふくらんでいた。細い階段をかけ上つて、甲板に立つと、次第に遠くなる山々を眺め思いにふけつていく人も多く、又、カメラを相手に「カモメ」と題する芸術写真を撮ろうと、はりきっている人、スカーフをして、海の水から目を離さない人、皆思い思いの自分の時間を過ごしていた。寒くなつたので船室に戻ると、テレビの周りは黒山の人。何かと思つてのそくと、祇園祭の中継をやっていた。しばらくは、京都をなつかしく思い浮かべ、バイトに精を出している友人は、さぞ暑い暑いを連発しているだろうと想像した。そうこう思っているうちに釜めしの登場！朝が早かつたので美味しかつたこと。わずかに数分間で釜の底まできれいに平らげた。トランプやゲームそして午睡を楽しんでいるうちに、いつのまにか函館の山々が見え出した。連絡船を降りる頃には雨も止んで私達の旅行を心から歓迎してくれるかのように嬉しかつた。函館駅からバスで、その日の宿舎、花菱旅館へ向かつた。途中、北海道らしい草原とサイロをみて、やつと着いたと思つた。

こうして私達の北海道での第一歩が始まつたのである。

